

小美玉市指定有形文化財（建造物第6号）

小美玉市民家園

— 旧小松家住宅 —



平成7・8年、この民家は上玉里・小松家から寄贈を受け、解体・復元・保存・修理を行って、移築したものです。

古民家は当時の農家の日常、衣食住の生活や生産、村落社会での風俗習慣などを知り、それらを追体験できる貴重な資料であり、歴史を目に見える形で今に伝える建物文化財です。

この民家は、次のような特徴をもっています。

- ◆建築の時期は、「ひろま型」の間取り（「田の字型」への移行がみられる）、三本溝の敷居、太くない梁（この時期の特徴）、ひろま部分の差し鴨居（成は大きくない）、へや（なんど）への出入り口「なんどかまえ」、しとみ戸などの意匠・構法から、1700年代末（江戸中期、約230年前）と推定され、現在、玉里地区に残る民家では最も古い様式のものとして推測されます。
- ◆当時の上層農家の諸様式をもっています。[古文書に寛政三亥年（1787年）、庄屋 宇衛門代]とあることから、庄屋格の民家であることがわかり、推定建築時期ともほぼ一致しています。
- ◆県北地方のみならず南部にもかなり分布した「曲り屋」であり、しかも土間全体が大きく曲がる「土間曲り」で、さらに、うまや（厩）がもう一つ曲がりを持ち、全体で「二つの曲がり」をもつ珍しい様式です。
- ◆へや（なんど）のざしき側のものは、「さんべや」（産部屋）と伝承されていましたが、その痕跡（しの竹のすのこの一部）が解体時に発見され、復元されました。当時の民俗を知る貴重な部分です。その他の多くの様式が、この時代の農家住宅をよく物語っています。
- ◆全体として解体・復元を通じて確認された事実に基づき、可能な限り忠実に再現しています。部材も使用不可能な部分を除き最大限に復元しています。



内部様式の特徴

三本溝の敷居(しきい)

外の溝2本に板戸(2枚)を引き違いに立て、内側の1本に障子1枚を立てる。

昼間は板戸を重ねて引き障子で明かりをとる。1間のうち常に半分は板戸となる。雨戸が一般化し、へやがより明るくなるのは、江戸時代後期のこと。



ぶつだん(仏壇)

ちょうばの北側壁に設置されており、ひろま型上層農家の特徴があらわれている。この地域で、現在ひろく見られる仏壇が一般化するの、19世紀(江戸末期)以降のことであった。



ちょうばと手あぶりのいろいろ

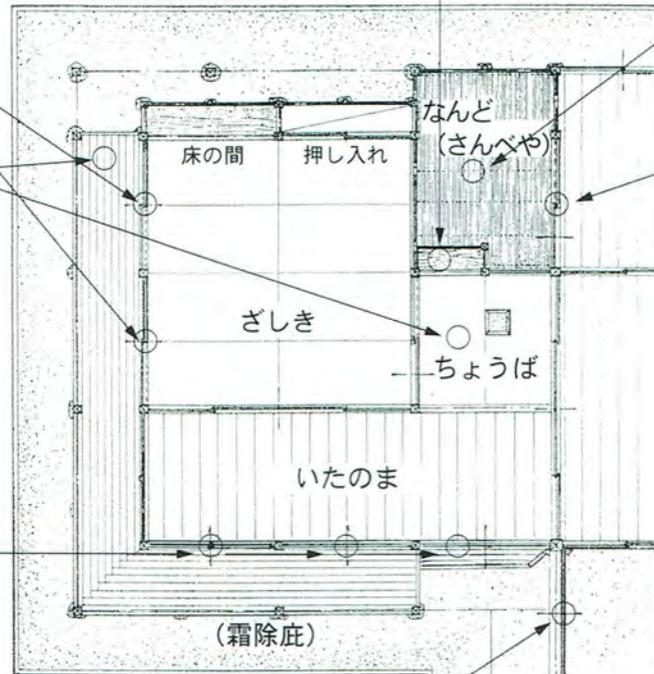
庄屋としての執務などのとき使われたへや。

ぬれえん

建築当初から設置されていた。特に縁框(かまち)は当初材である。縁板は当初材ないしそれにごく近いものである。縁板の目地は「たにきりめじ」(谷切り目地)と呼ばれるもので、数寄屋などに見られる。

部戸(しとみど)

上の戸は内側(寺社の場合多くは外側)に持ち上げて鉤で固定し、明かりをとる。(半部、釣部)。下の戸は溝に沿って引き上げて外すことができる。柱に上の戸を固定する痕跡があり、それにより復元した。



出入り口

ひろま側の出入り口は一枚が「はめごろし」(取り外しは可能)になっていて日常は、可動するもう一枚の方で出入りしていた。

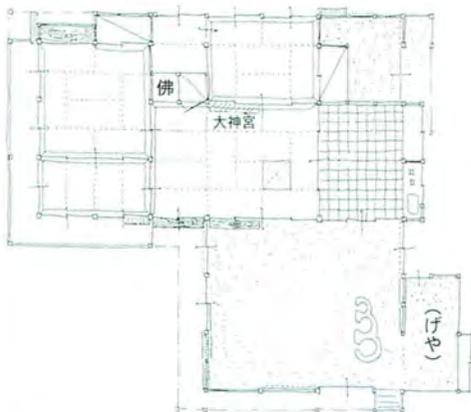


板庇(いたびさし)(土庇、霜除庇)

柱にのこる痕跡から復元した。当初の庇は、板で葺かれていた。

解体・修理前の平面図

(生活様式の変化にともない生活の便利のため民家は改修がくり返しおこなわれてきた。古民家の復元は、一般的にその民家の特徴がよく表れている時期の姿にする。今回の復元は、建築当時の姿にすることを目的としている。)



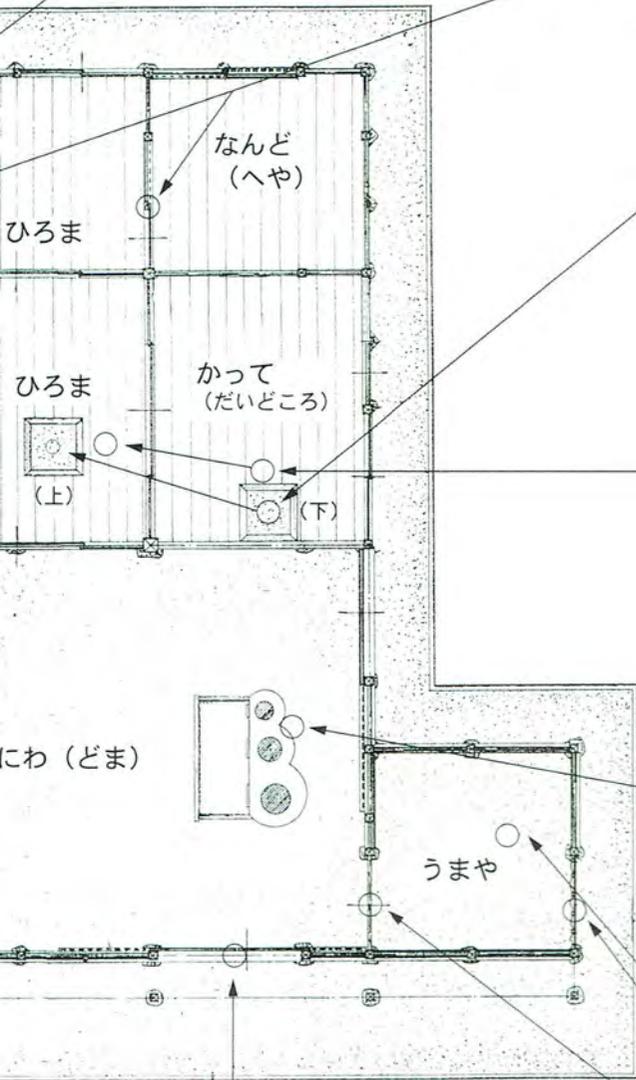
建物の当初の諸様式を発見するため精密な調査をすすめ、可能な限りの部材を復元するため慎重な解体工事が行われた。(平成7年度)

なんど(へや)・さんべや



納戸の一つで、入り口のつくりは納戸構え。お産にも使われたとの言い伝えがあった部屋。解体時に竹すの子の一部が発見され、言い伝えが確認され復元された。

床下には下図のように盛り土がなされている。



にわ(どま)出入口

馬の出入りや農作業に伴う出入りは、高さ、うちのり、ともに他のものより高く広い南側の出入口が使用された。

とほぐちなどともいう。

東側出入口は、かって(勝手)作業などに使用された。これらの出入口の戸は、大戸(おおど)ではなく当時は2枚引きの板戸であり、大戸(1間幅くらいの1枚戸)が一般化するのはこの地域の農村住宅においては、19世紀を過ぎてからであった。



なんど構え(納戸がまえ)

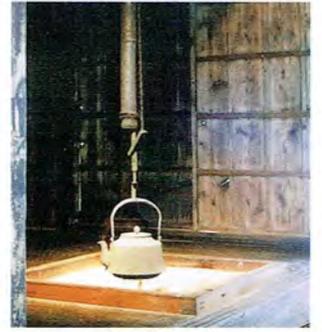
なんど(へや)出入り口の様式の一つ。敷居を床より上げ、片袖(そで)壁で、片引きの板戸になる。この地方では240~50年前までで、その後は引き違い戸に変わっていく。納戸構えは寝殿造りにも見られる様式。



自在鉤(じざいかぎ)

または鉤づるし

解体時に天井に保存されていた当初のもの、一部修理。鉄びんや鍋をかけた。



いろり しも(下)いろり、かみ(上)いろり

下いろりは、痕跡から復元した。材料は壁土と同じ。ふだんは、下いろりが使われた。上がり框(かまち)と接したところがあるので便利であり、気がねない客の接待もおこなわれた。



かみ(上)いろりは、会合のときや一時期まゆの乾燥などに使われることが多かった。

かまど

当初の様式を復元した。壁土と同じ材料で作られている。

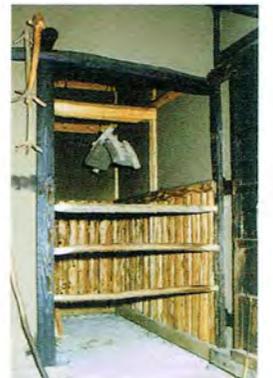


うまや(厩)

桁の相かき痕や、柱のませ棒穴の痕跡により、建築当初から厩があったことが確認され復元された。どまから曲がりを行なっている。

ませ棒は、厩の出入りの仕切りの棒で、かいば桶(まおけ)なども下げた。

敷き藁や馬肥(まごえ)の出し入れは、うしろにある別の出し入れ口から行った。



茅葺き

茅はカモノハシ（俗称シマカヤ）を用いている。シマカヤは強く長持ちし、美しい茅材として知られている。霞ヶ浦周辺の水辺では、かつて多数自生し使われていたが、現在は限られた地域にしかなくなってしまった。（このシマカヤは桜川村浮島妙岐ノ鼻の産）

棟（ぐし）

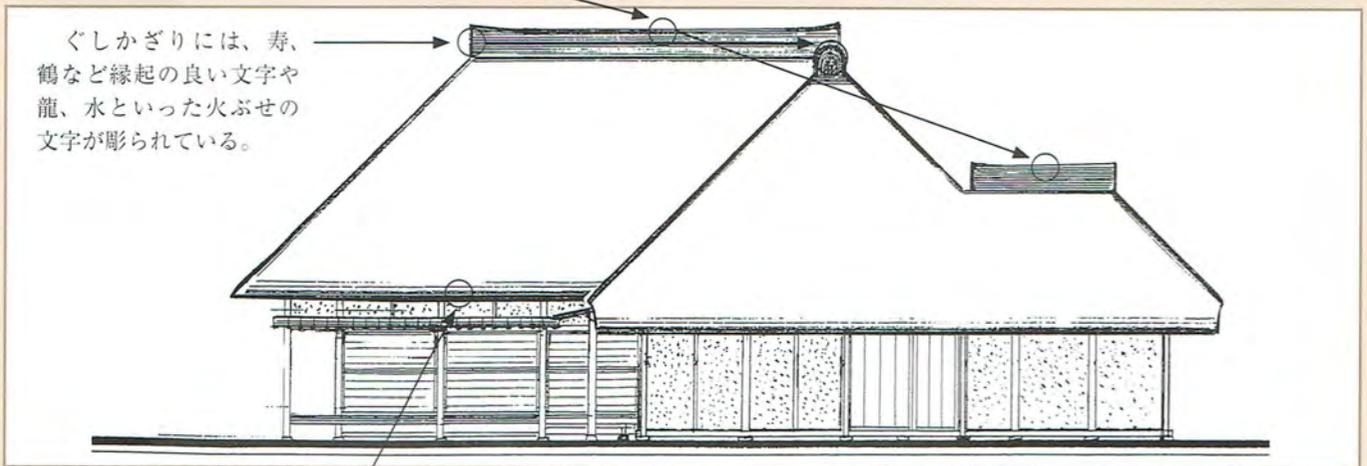
むねは竹簾（すだれ）で葺き、下に杉皮がひかれています。煙出しは、解体時にはついていましたが、建築当初の時代にはなく、後の改修でつけられたもの。



約230年前の当初建物を復元するため古建築の工法・技法により復元工事が行われた。（平成8年度）



解体前の全景

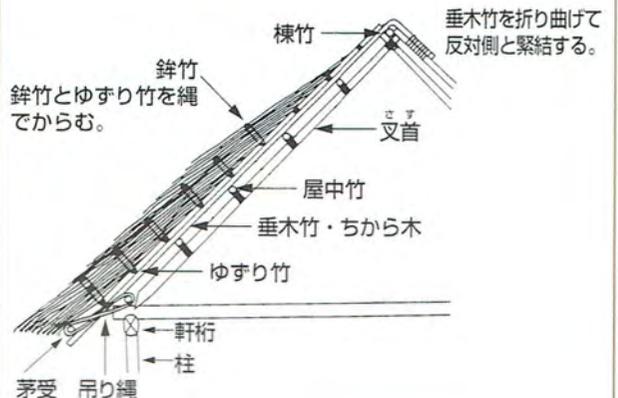


段葺き（だんぶき）

軒付けを装飾するため、稲藁・茅・葦など種類を変えて何段にも重ねる。茨城県南地方の特徴であった。この民家の場合、葺き替えが繰り返され行われたため当初の姿は不明だが、「かやで」の技術保存も考慮し、段葺き（五段）としてある。



茅葺き屋根の構造



建築面積 41.58 坪

ただし、床上入り側通りまで 1間 = 6尺0寸
四通り～六通り 1間 = 7尺0寸
その他 1間 = 6尺2寸

小美玉市教育委員会生涯学習課 / 玉里史料館

小美玉市民家園の利用について

建物文化財をより深く理解するため、見学だけでなく、ざしき・ひろま・どまなどを会議・講習会などに利用されるようお勧めします。史料館または民家園にご相談ください。

〒311-3433 茨城県小美玉市高崎 291-3
小美玉市生涯学習センター / 玉里史料館
TEL 0299 (26) 9111・FAX (26) 9261
(民家園) 茨城県小美玉市下玉里 1831
TEL 0299 (27) 0369